（個別の指導計画の効率的運用に向けたシステムの再提案に関する研究（要旨）

- 教員の強みを引き出すチーム作り -

発達臨床支援高度化コース　19AD101
佐藤　穂高

【指導教員】櫻井康博　名越斉子　葉石光一
【キーワード】特別支援学校　　協働　　相互理解　　個別の指導計画

１　問題の所在

本校では、個別の指導計画の活用に向けた教員間の話し合いの質を高めることを目標とし、「課題関連図（カード整理法）※1による実態把握と具体的な目標設定」をテーマに3 年間の学校研究で行った。教員間の話し合いが円滑になる、具体的な目標が共有できた、共通理解が図られた等は、先の課題解決に結びつく一定の成果をあげた。しかし、事後アンケートの結果、①個別の指導計画の有用性が教員間で希薄な傾向にあること、②教員間の話し合いの内容が個別の指導計画へ反映しにくい状況があることが明らかになった。ここで、筆者は各教員の集団への関わり方や話し合いへの参画の仕方等個別の指導計画の活用に必要な要素であると考え、教員間の関係と話し合いに改めて着目した。

※１筑波大附属桐が丘特別支援学校・埼玉県立宮代特別支援学校で研究されてきた取り組みを本校の実態に合わせた様式、流れで行った取り組み（課題関連図）のことを指す。現在では、「流れ図」として名称を変更し運用している。

２　目的

「教員集団の協働※２に向け、学校は教員個人の懸念を解消するなどの誘因を提供する必要があり、教員集団の協働化が進むことで、個別の指導計画の効率的な運用ができるのではないか」という仮説を立証していく。

※２協働とは、『各教員の多様な視点を活かした児童生徒の実態の認識と確認、児童生徒の目標の形成、チームティーチングとその成果の確認を教員集団で共有し進めていき循環すること』を指す。

３　研究Ⅰ

中学部教員２９名を対象とし、『各教員の多様な視点を活かした児童生徒の実態の認識と確認』での話し合いの内容が、『児童生徒の目標の形成』に繋がりやすくするための「誘因」として、教員の相互理解に向けた教育観・児童生徒を見る視点、大切にしていることの視覚化の実施（図１）

児童生徒の実態を把握する際、大切にしている視点	A	B	C	D	E
保護者からの情報	6	3	2	3	2
医療・福祉関係者からの情報	5	8	5	6	4
感覚の特徴	9	1	6	5	8
身体の状態や動き	8	2	1	4	6
認知的特徴（知的段階等）	3	5	3	8	3
健康状態	2	7	9	1	1
人との関わり・表情・表出	1	4	4	2	7
昨年度の引継ぎ	4	6	7	7	5
諸検査等の結果	7	9	8	9	9

図１

４　研究Ⅱ

『児童生徒の目標の形成』での話し合いの内容が『チームティーチング』に繋がりやすくするための「誘因」として、当事者意識を醸成するための視覚化カードを活用（図２）

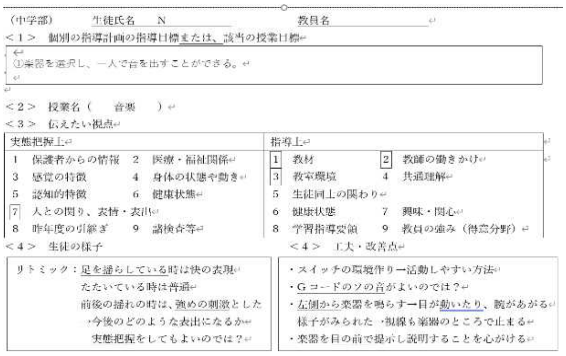

図２

５　研究の成果

研究Ⅰの「教育観・大切にしていることのランキングによる視覚化」の取り組みは、研究前後のアンケート調査の結果から、話し合いに臨む教員の不安を少なからず軽減させ、各教員の多様な視点を受容し、相互理解を促進させるという一定の成果を得ることができた。研究Ⅱは、相互理解が促進された教員集団の元、個別の指導計画作成・修正や授業作りの際の話し合いの内容を実践につなげるための方法として取り組んだ。抽出した中学部教員からのインタビューの結果、「自分の視点を明確に伝えることで、意図を相互に理解し、話すことができたことで、授業に話し合いの内容をつなげられた」など、成果があったといえる。

６　本研究のまとめと今後の展望

研究後のアンケート調査で「話し合いをしていく上で、相手の大切にしたいことの視覚化は有効か」について、教員からの一定の支持を受けるなど成果を得た。しかし、本研究が生徒にどのような変化をもたらしたのかを明確に検証することはできなかったため、個別の指導計画の効率的な運用につながるまでのシステムの構築と定着を図るまでには至らなかった。各教員が同僚の多様な視点を受容し、自分の強みを活かして実践に臨めるようにしていくために、そしてその成果が生徒にどのような変容をもたらすのかを検証していくためにも、今後も研究を続けていく。

学校全体としては、教員の多様な視点による生き生きとした児童生徒の実態と教員の強みを活かした指導・支援を共有できる場を設定、個別の指導計画や授業作りに活用するまでの流れを本校の実態に合わせて定着させていきたい。これが、個別の指導計画の効率的運用にむけたシステム作りにつながる一歩だと考えてこれからも、実践を続けていきたい。